

古典古代における「政治」と「経済」について：覚書

稲葉 振一郎

本稿では、前号所載の拙稿「政治の理論のための覚書」（以下「前稿」）第4節における、近代的な「経済 economy」概念に対する古典古代におけるカウンターパート（それは当然 economy の語源たる *oikonomia* ではない）に関する議論の更なる敷衍を試みる。

近代人にとっての「経済」の中心であるところの市民社会における市民間の取引関係の、古典古代におけるカウンターパートをどのようにとらえるべきか、について、前稿では以下のように論じた：

古典古代のギリシア、ローマにおいては、我々が民間レベルでの私的な取引と考えるものも、一種の「政治」であった、と考えた方がよい。

スミス以降の近代の経済学、リベラルな統治理性のもとでの、市場経済における取引活動がなぜ「政治」とはみなしがたいのかといえ、そこでは人々は、具体的な取引相手との双方向的なコミュニケーションを通じてよりも、匿名的な力（これは言うまでもなくフーコー的な意味での「権力」である）としての市場の「みえざる手」、価格メカニズムや競争圧力に一方的に、受動的に適應する、という形で行動する傾向があるからだ。しかしもちろん具体的かつミクロ的に見れば、我々の日常的な経済活動は、

具体的に顔の見える相手との双方向的なコミュニケーションを通じてのものからも成り立っている。ただ、支配的、典型的なモードが、こうしたコミュニケーションな行為なのか、それとも匿名的な相場への受動的な追随（独占企業による市場支配や、政府によるコントロールはその裏返しにすぎない）なのか、は議論の余地がある。しかし経済学が想定する市場経済の理念的極限としての完全競争は、プライステイカーの仮定があてはまる、つまりはコミュニケーション不在の状況である。ゲーム理論による革新は次第に状況を変えつつあるとはいえ、近代の経済学の伝統においては、学の基準をなすのは「みえざる手」、匿名的な市場の力の理論であって、具体的な主体間のコミュニケーションな関係の分析ではない。

しかしそうした市場イメージは、古典古代の世界には成り立っていないのではないかと？ 家のレベルを超えた取引を含む経済活動は基本的に、有産者市民同士の双方向的なコミュニケーションによるものであり、その意味ではポリスのこと、あるいはレス・プブリカ——普通の意味での「政治」と捉ぶところはない。ただ、普通の意味での政治、つまりポリスの事業とは異なって、共同体全体を巻き込まず、局所的であるというだけのことである。

以上のように解釈することで、我々は、例えばハンナ・アレントが提示しているような奇妙

に高踏的な古典古代イメージを修正して、よりリアルな古典古代の政治、そして市民社会モデルを手に入れることができるだろう。『人間の条件』などにおけるアレントの古典古代の「政治」論は、ともすれば「私有財産を基盤として、生存の憂いから解放された市民同士の、それ自体が自己目的化した自由な交流」として、つまりはほとんど「社交」と捉ふところがないかのようなものとして読めてしまう。しかしその一方でアレントは、近世の宮廷「社会」における「社交」に冷笑的な筆を及ぼしているし、市場もまた一種の公的領域に他ならない、と発言している。そのあたり一貫しない、腰砕けな印象をアレントの市場論、経済論は与える。

しかしながら我々は、古典古代においても、我々ならば「経済」と呼ぶだろう、市場における売買や、金融取引を通じた、物財のシステムティックな流通が存在したことを踏まえて、それをも取り込んだ「政治」のイメージを作らなければならない。そうすると、個別の「家政」の枠を超えて、複数の家、家政の間での取引を含めた経済活動、更にそこから派生する紛争、訴訟などは、たとえ局所的なもの——つまりは、市民社会レベルのものであっても「政治」と呼ぶことが適切であることになる。そしてその延長線上に、一個のポリス、レス・プブリカ、法共同体全体を巻き込んだ共同事業をも位置づけていけばよい。

我々は古典古代人の「政治」を、アレントが知ってか知らずかミスリードしたように「私有財産を基盤として、生存の憂いから解放された市民同士の、それ自体が自己目的化した自由な交流」つまり「衣食足りて礼節を知る人々の、時に命をもかけた、自己目的的な余暇活動」と見なす必要はない。古典古代の市民たちも、私的な利益を求めてビジネスに果敢に参加したし、また公的な政治においても、しばしばそう

した私的な利害は絡んでいただろう。私的な利害からは切断された公德心に導かれた、高貴で自己目的的な営為として彼らの「政治」を崇め奉る必要はない。ただ、彼らのビジネスも政治も、公的な領域において、コミュニカティブな営為として行われていた。つまりビジネスは市場の匿名的な力への一方的服従ではなかったし、政治もまた、有力者に対する一方的な屈従／無力な民に対する一方的な支配ではなかった。それはあくまで、名前を持ち、卓越した存在感を公共圏において発揮することを望む、自由人同士の関係だったのである。

古代ギリシア史の泰斗モーゼス・フィンリーは『古典古代の経済』において、ケケローなどを引きつつ、共和政期ローマの貴族にとっては、たしかにアレントも示唆するような、大土地所有に基づく自給自足を基盤とする自律がセルフ・イメージを支配しており、商業や金融はすすんで就くべき営みとはされていなかった、と指摘する。古典古代にはそれらは主として外国人や奴隷の領分であり、逆に土地所有は自由な市民の特権であった。しかしこうした貴族たちの所領経営も商業や金融と無縁ではありえず、それを管理する奴隷を必要としており、そうした奴隷たちは解放され自由人となっても、多くの場合「子分(クリエンテース)」としてその政治力を支えた。更にフィンリーは、こうした貴族たちの行う金融取引は、政治的な影響力行使と不可分であったことも強調している。

このように(やや理念的に過ぎるが)捉えたとすると、大体において以下のようなコントラストを、古典古代と近代との間に見て取ることができる。

近代において、参加者の数が増え、取り扱われる財やサービスの量も種類も増えて大規模化し複雑化した市民社会においては、ローカルな

取引は徐々にコミュニカティブな性質を薄め、ルーティンワーク化、つまりは脱政治化されていく。人々はローカルな取引を、具体的な他者とのコミュニカティブな交渉というよりは、匿名的な市場の「見えざる手」への適応と感じるようになり、そうした匿名的な力による拘束はあっても、具体的な他者からの干渉は感じられない状態をこそ「自由」と見なすようになる。

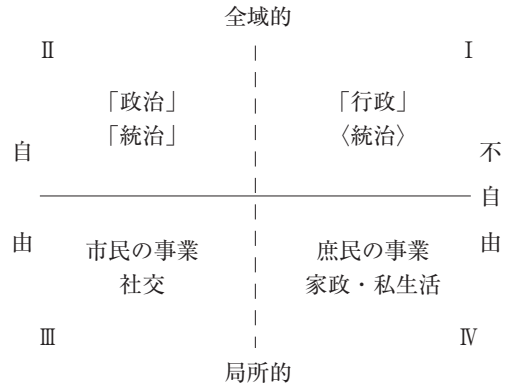
そのようにローカルな取引を「政治」と感じられなくなった人々にとって残る「政治」とは、より広い大域的な政治、都市や国家レベルの大きな共同体、市民社会全体を巻き込む公事のこととなってしまふ。市民間の個別の取引や紛争、更にそれを裁定する訴訟などは「政治」とは感じられない。それに対してそうした個別の取引を規制し、紛争を裁定する大枠としての法の制定や、私人の手におえない大規模な公共事業とそれをめぐる意思決定こそが、近代人にとっては「政治」として意識される。

以上は古典的な意味での「政治」だったはずの営為が脱政治化されて今日的な意味での「経済」に——あるいはハンナ・アレントの言う意味での「社会」になる、という意味転換である。これに対してももちろん、反対に古典的な意味での「政治」ではありえなかったものが近代においては「政治」と見なされるようになる、という転換もある。すなわち、立法や公共事業であっても、それが社会を構成する自由な市民たちの、議論を通じての共同事業としてではなく、統治権力を独占する誰かによる一方的な事業としてなされるのであれば、それは古典的な意味での「政治」ではなく、「行政」である。

もう少し図式的に整理すると、「公的／私的」という対立軸は、「大域的・全社会的／局所的・個人的」という対立軸と、「自由・コミュニカティブ／不自由・機械的・規律的」といった対立軸とが組み合わさってできあがったものであ

る、とみることができる。

単純に「大域的・全社会的／局所的・個人的」軸と「自由・コミュニカティブ／不自由・機械的・規律的」とを組み合わせると、2×2で四つの象限が出来上がる。



古典古代の民主政、共和政のイメージでは、この図において重要なのは横軸であり、縦軸を挟んで左側が公的領域、右下が私的領域、ということになる。ここで「庶民」という紛らわしい表現を用いたが、古典古代であればこれは市民権を持たない外国人、貧民、被差別隷属民、あるいは奴隷などを考えるとよいだろう。ほとんど家政と区別はできない領域である。右上は行政、公共政策、公共事業に該当するが、こうした政策・行政実務を執行する公職に対して、厳しい任期の制限やくじ引きによる選出といった工夫によって、それがエスタブリッシュメントとして自立することを防ぐのが古典的な共和政、民主政の眼目であった。

公事と私事の対比は左上、公的集会での討論と意思決定と、右下、家事、家政の対比によってこそ明確となるが、右上の公的行政や左下の市民の事業の存在を忘れてはならない。無論上述のように古典古代の共和政は右上領域の自立を防ごうとしたが、左下、市民の自由なビジネスについては必ずしもそれは当たらないだろう

う。

それに対して近代——我々にとっては、横軸を挟んで上が公的、下が私的ということになる。ただしそこで左下、政府の機構ではない私的な組織や団体、あるいは交流であるが、その存在や活動が公開され、公示されたルールに従う市民社会的なものの位置づけにしばしば混乱を来し、それらに対して public でも private でもない formal、official、「公式」といった形容が苦し紛れになされる。

アレント的な意味における「社会」は左上の、狭い意味での政治をのぞいた三つの象限全部ということになる。左下、市民社会における市民の自由な事業や社交も、市場経済の大規模化と複雑化に伴い、具体的な取引相手や交際相手の顔が消失し、匿名の市場やサービス産業相手のものに墮してしまうし、右上、公的行政は官僚機構の自立によって「政治」の統制を離れてしまう、というわけである。

この構図を、近代的な政治経済の歴史について、広く普及している他の図式と比較してみよう。まず第一に、前稿第3節でフーコーの仕事について瞥見したときにふれた、経済学説史的なパースペクティブを思い出してみよう。つまり、スミスの『国富論』を旋回軸として、18世紀以前の political oeconomy から、19世紀以降の political economy への転換という図式である。

それによれば、18世紀の political oeconomy は政策主体論としての国家論まで含めた総合的な「政治経済学」であったのに対して、リカードゥ以降の political oeconomy は人為によらない自律的なメカニズムとしての市場経済の論理を客観的に解明することを目指す実証科学としての「経済学」economics へと舵を切り、「政治」を忘却する、あるいは抑圧する。しかしながらマルクス主義という異議申し立ては、「経済学」が

自然で自明なもののみならず市場経済＝資本主義を、他と比較し、取り替えることもできる、政治的な選択の対象である、と主張して、「政治経済学」を復権させようとした。また19世紀末以降の現実の歴史的展開も、市場経済の自律的な運動への信頼が崩れて、市場経済を否定する、まではいかなくとも、それに対して絶えず政策的な操作、介入を加えなければならない、という立場を一般化させた。

しかしながらここでの共和主義的構図に照らして言えば、この「政治から市場へ、更にまた政治へ」、あるいは「市場対政治」の対立図式における「政治」とはつまりは〈統治〉＝「行政」のことでしかなく、そこには「統治」＝（語の本来の意味での）「政治」の姿はそもそもない。先の四象限図式でいえば、縦軸の右側、第Ⅰ象限と第Ⅳ象限の往復だけがあって、左側、第Ⅱ象限と第Ⅲ象限が射程に入っていない。

これに対して、「公共性」についての思想家として、20世紀後半以降アレントと並ぶ影響力を發揮した、ユルゲン・ハーバーマスの議論の方はどうだろうか？ ハーバーマスは戦後（西）ドイツの社会哲学者で、いわゆる西洋（西側の非共産党系）マルクス主義（これは非常に広い意味での「新左翼」の理論的バックボーンである）の一方の雄たるフランクフルト学派の戦後世代の代表選手であり、アレントの『人間の条件』刊行に少し遅れて『公共性の構造転換』を發表した。そこでハーバーマスはアレント同様、古典古代ギリシアの民主政に「公共性」のパラダイムを見出したが、アレントとは異なり、近代市民社会におけるリベラル・デモクラシーと市場経済のセット——ハーバーマスの言葉に従えば「市民的公共性」と呼べるか——とそれを切断することなく、後者をも肯定的に捉えた。そして18世紀末の転換——「市民的公

共性」の確立——は、単に政策レベルでの国家介入主義から自由主義への転換としてのみならず、政治レベルでの絶対主義から市民的共和主義、更に民主主義へ向けての転換としてもとらえられる。それに対して19世紀末の転換——「市民的公共性」の衰退——は、政策レベルでの介入主義への回帰としてだけではなく、政治レベルでも、官僚制（政府のみならず政党、民間団体いずれにおいても）の成長による共和主義の圧殺として理解される。20世紀の全体主義の勃興も、このようなパースペクティブの中——つまりは官僚制組織の暴走と、その対極におかれた一般大衆の無力化とヒステリーとして——位置づけられることになる。つまりハーバーマスの構図では、自由市場経済から国家独占資本主義への転換と、全般的官僚制化の進行によるリベラル・デモクラシーの空洞化とは並行して捉えられている。

ハーバーマスの議論においては、古典的な意味での「政治」が射程に収められている。マルクス主義は批判対象としての経済学にいわば絡め取られて、「資本主義か社会主義か」というマクロ的な体制選択をめぐる階級闘争に「政治」を還元してしまい、経済体制に還元されない、固有の意味での「政治」があるということを理解できなくなった。これに対して、「政治」を「経済」に、「コミュニケーション」を「労働」に従属させる共産党系の正統派マルクス主義から離れて、「政治」「コミュニケーション」の次元の固有性を主張するハーバーマスの思想は、ソ連型社会主義が崩壊し、「資本主義か社会主義か」の体制選択が問題とならなくなった後も失効をまぬかれ、アレントのそれと並んで「市民社会」と「公共性」の理論の基礎となるべきものとして読まれ続けた。しかしながらハーバーマスの「市民的公共性」論も、ここで我々が提示した図式から見れば、その限界は明らか

である。つまりそこでは、先の古典的な経済学史のパースペクティブの、第Ⅰ象限と第Ⅳ象限の往復に加えて、第Ⅰ象限と第Ⅱ象限の往復も射程に収められているが、依然として第Ⅲ象限はうまく捉え切れていない。全く無視されているというわけではないのだが、ハーバーマスはこの「市民社会における市民の自由な交流」を、「大きな、全体社会、国家レベルの「政治」への準備段階としての、自由な対話を通じた世論（公論）形成」に偏って描く嫌いがあり、その結果、いわば局所的な、小さな「政治」としての社交や商取引が軽視されてしまう。

もう少しデリケートに、ハーバーマスの「市民的公共性」——それは大体において、リベリズムの二点セットと同一視できる——との対比において、「古典的公共性」（ハーバーマスが「ギリシア的公共性」と呼んでいるものに近い）とでも呼ぶべき共和主義モデルの姿を浮かび上がらせてみよう。古典古代的な共和主義の想定する政治社会においては、ひとりひとりの市民は、私有財産にその自由と独立の基盤を置いている。市民たちの私有財産＝私的領域は、公道や広場など、誰の私有財産でもなく、誰でもそこを自由に利用できるが、占有はできない公的領域＝公共圏によって繋がれている。この公共圏の創出と維持が、我々が普通に考える意味での、いわば大文字の「政治」であるが、市民同士の公共圏を介しての局所的な交流——利益を目的とする経済取引や、必ずしもそうではない社交や慈善活動——もまた、私事ではなくいわば小文字の「政治」である。そこでは人々は顔と名前の一致する人格的な間柄を保つが、かといってそれは公的な関係であるから、私的な家の中での家族同士の親密性とは性質を異にする。

しかしながらここで市民人口が増え、潜在的

には無限の数の市民が公共圏に出入りするようになったとしよう。そうなると、ことに私的利益を目標とする経済取引を中心に、特定の顔の見える取引相手との関係ではなく、匿名的な「市場」全体との関係が重要になってくる。近代において、スミスが「みえざる手」というメタファーで言い表そうとしたものがこれである。「市場」は自由な市民同士が出会う公的領域というよりは、一方的にその匿名的な力に従属すべき「第二の自然」のごときものとなり、かくて小文字の「政治」はその意義を減じていく。

もとより大文字の「政治」の方についても、類似の展開をみてとることはできるだろう。公的意思決定のための討議の参加者が多くなれば、討論を通じての一致や妥協に至ることはどんどん困難となり、機械的な多数決や、リーダーへの委任が幅を利かすようになる。そもそも小文字の「政治」が衰退すれば、大文字の「政治」をその積み上げとしてとらえることもできなくなる。

この「古典的公共性の構造転換」とでもいうべきメカニズムが、たとえばローマ共和政の没落を引き起こした、とは言うまい。古代経済において「みえざる手」と呼べるほどの自律的な価格メカニズムがどこまで成立していたか、の検証は困難であろう。また「帝国の成長に伴う、ローマ市民権の拡大が、共和政の機能不全をもたらした」という言い方は間違いではないとしても単純すぎる。しかしこうしたメカニズムが多少なりとも作動していた、とまでは言うるのではないかと。更に踏み込むならば、このメカニズム自体は近代においても見て取ることができるのではないかと。

これに対してハーバーマスの「市民的公共性の構造転換」論は、先にみたとおり、我々の古典的公共性の四象限モデルがとらえた問題状況のうち、小文字の「政治」の次元をうまく射程

に収められない、という重大な欠点を持つ。より正確に言えば、小文字の「政治」のとらえ方が偏っているのである。国家などのレベルでの大文字の「政治」へと貢献しない、市民の自由な交流と、私生活での親密さを、ハーバーマスはうまく区別できない。社交や商取引をも公的な「政治」として理解することができないのである。

ここで改めて、ハーバーマスの「市民的公共性」論の意義を確認しておこう。

元来西洋マルクス主義をその出自に持つとはいえ、今となってはハーバーマスの「市民的公共性」をめぐる議論は、現代リベラリズムの政治哲学のひとつの頂点として位置づけられる。実際、彼の言う「市民的公共性」のモデルは、現代リベラリズムの両輪たる、リベラル・デモクラシーと自由な市場経済からなる。そして19世紀末の構造転換は、単なる変容というより、一種の墮落、逸脱として描かれる。『公共性の構造転換』でのハーバーマスの立論は、社会の現実の歴史的な変化についての実証的な記述とそのメカニズムの解明を目指すだけではなく、望ましい社会モデルとしてのリベラルな政治経済秩序の理念を提示したうえで、社会の現状をそれに照らして批判する、規範的な理論としての意味合いをも持っているのである。大部かつ規範的議論に集中したロールズ『正義論』や、難解な歴史分析に集中し、かつその規範的主張が必ずしも明快ではないアレントやフーコーの著作とは異なり、ハーバーマスの『公共性の構造転換』は比較的コンパクトな書物でありながら、規範理論と実証分析の両方を詰め込み、かつ分かりやすいという美点を持っていた。その美点はその後ハーバーマスが、主として規範理論に偏った著作を膨大にもものしていった中で、より一層、いわば「原点」として鮮明になって

きたとさえいえる。ハーバーマスの立論においては、社会批判の根拠が単に（たとえばロールズの特に初期の著作がそういう印象を与えかねないが）超越的な観念の樓閣ではなく、社会的な現実、しかも（アレントのような時間的に遠すぎる古代ではなく）比較的近い過去に置かれている、と読めるので、親しみやすくもある。

それでもなお、ハーバーマスの議論は、やはり現代リベラリズムの規範理論の抱える共通の弱点である、リベラル・デモクラシーと自由市場経済の關係の意義、について十分な理解を提供できていない、という問題を抱え込んでいる。

リベラル・デモクラシーは政党と政府の官僚機構に、自由市場経済は巨大企業の官僚機構とその下での独占資本主義に、それぞれとってかわられ、自由な個人が主役の政治と経済は、官僚組織主体のものになってしまう——このようなイメージ自体はもちろん、彼の独創ではない。その背景にはレーニンの『帝国主義論』を中心とした資本主義経済の発展段階理論や、ウェーバーの社会学、とりわけ官僚制論がある。いずれにせよそこでは、政治と経済における並行した変化が見出されているのだが、その並行性の性質は必ずしも明らかではない。

確認するが、リベラリズムの両輪をなすリベラル・デモクラシーと自由な市場経済との關係は、それほどはっきりしていない。リベラル・デモクラシーにおける政治参加の主体としての個人の自由と、自由な市場経済の下での個人の経済活動の自由には、重なり合うところもあるが違いも大きい。アイザイア・バーリンの「積極的自由／消極的自由」の區別を想起していただいてもよい（バーリン「二つの自由概念」）が、前者では、個人の自由な活動の最終的な目標は、その個人の「私益 private interest」ではなく、個人の属する政治的統一体——国家、共

同体レベルの「公益 public interest」であるのに対して、後者では公益への消極的な配慮はともかく、積極的にコミットすることは求められず、あくまで私益の追求がその目標である。

また前稿でもふれたように、自由な市場経済を支える制度的な土台を供給する政治体制が、リベラル・デモクラシーである必要はかならずしもないように見える（たとえば他ならぬスミス『国富論』、また20世紀後半の開発経済学における「韓国モデル」——非民主的強権政治による自由な市場経済の促進——がその例）し、またリベラル・デモクラシーが自由な市場経済を捨てて、例えば中央指令型計画経済への移行を選ぶ可能性もある（実際、ベルンシュタインなど初期の社会民主主義はその可能性に賭け、実際20世紀の社民政権においては、一時、基幹産業の国有化政策が追求された）。結局のところ両者は不可分の組み合わせというよりは、相互に影響を及ぼしあはするものの基本的には独立の、別個の存在のように見える。だとすれば、ハーバーマスのいう「公共性の構造転換」も、それをどのようにとらえたらよいのか、は一筋縄ではいかない問題である。

伝統的なマルクス主義の図式においては、基底的なレベルをなすのは経済の方であり、資本主義経済の構造変化——自由主義から独占資本主義への移行が、要請される社会経済政策を変え、政治体制をも変えていく、というロジックで「政治」と「経済」の関連付けがなされる。そうした還元主義に対して「政治」の次元の固有性を主張するところに、我々はハーバーマスの美点を見出した。しかし、実際のところハーバーマスは伝統的マルクス主義に対して、本当のところはどの程度優れた展望を提示しえているのだろうか？ レーニンなどを見る限り、自由主義から独占資本主義への移行に対応する、西欧先進諸国の政治体制変化は、制限選挙制に

立脚した貴族・資本家層による議会の独占的支配から、労働者階級の政治的成長に対応して彼らを体制内に取り込むべく、参政権を拡大していく、というものとして——つまりは「民主化」の方向でマルクス主義においてもとらえられていた。つまり、オーソドックスなマルクス主義の19世紀末～20世紀初の転換期理解では、「経済」においてはリベラリズムの衰退が見出されているが、「政治」においてはリベラル——かどうかはともかく、デモクラシーの成長が見出されている。それは現実の社会史の認識においては、『構造転換』のハーバーマスよりも適切かもしれない。

現実問題としてみれば、19世紀前半において確立したのはあくまでも「市民的公共性の理念」であって、参政権というレベルでのその制度的確立は半世紀以上遅れてしまっているのだが、それはまさにハーバーマスのいう「公共性の構造転換」、つまり「市民的公共性の理念」の没落、陳腐化の時代と重なってしまうことになる。いずれにせよ「公共性の構造転換」を、単純にリベラル・デモクラシーの没落、ととらえることは許されなくなる。うがった言い方をしてしまえば、19世紀前半に理念として確立したリベラル・デモクラシーが、19世紀末に制度的に実現されていくとともに幻滅を引き起こしていく過程として理解した方がまだしもである。

また、経済面においても、19世紀以降の資本主義が「独占資本主義」に変質したと安易に言ってしまうとよいものかどうかについて、疑問が残る。それ自体官僚制的な巨大組織である大企業が発展し、いくつかの産業で独占的な振る舞いをするようになったことは事実である。しかし、そのことをもってあたかも「本来あるべき市場経済、資本主義からの逸脱、墮落」であるかのように論じることには大いに問題がある。大企業であっても将来出現してくるかもしれ

れない未知のライバルまで含めれば、決して競争から自由であるわけではなく、厳密な独占の場合ならともかく、企業の巨大化が即、市場における価格メカニズムの歪み、機能不全を生むとは限らない。それもまた経済の現実の変化というよりは、多分に経済的自由主義という思想への幻滅という意味合いが強かったのではないか。

結論的に言えば、ハーバーマスの言う「公共性の構造転換」とは、制度や社会経済的実体レベルのものというよりは、人々が社会について抱き、政治活動を行う際に指針となす思想、理念レベルの転換であると考えた方がよい。とは言えハーバーマスは単に重要な思想家のテキストを読み込んで思想史、理念史を追究するにとどまらず、そうした「理念」を結晶化させる社会的な実体の歴史、思想のインフラストラクチャーの社会史にこそ焦点を当てていた。つまり政治社会思想が流通するフィールドとしての、商人や知識人が交流するコーヒーハウスやサロンなどの社交の場、更に大量の印刷物の出版と流通が生み出す、ジャーナリズム、マスコミュニケーションというバーチャルな社交空間こそ、彼が「市民的公共性」と呼んだものの内実である（この意味ではハーバーマスの言う“Öffentlichkeit”は「公共性」とではなく、英訳の“public sphere”のように「公共圏」「公共領域」と訳されるべきであったかもしれない）。「市民的公共性の理念」を生み出したそれらの社会的交流は、ある程度はまさにその理念の具体化になっていたかもしれない。

だがそこでの、理念と現実との幸福な一致は——政治的・文化的コミュニケーション空間のみならず、市場経済のビジネス空間についても——、このプロトタイプ的な「市民的公共性の空間」が、実際には古典的共和主義の場合と同様、一定以上の財産と教養を備えた、社会的に

見れば少数のエリートによって構成されていたがゆえに成り立っていたのではないか？ という疑問がまずは成り立つ。実際「市民的公共性の理念」の理論的プロトタイプの体现者とハーバーマスが見なすカントにせよミルにせよ、この問題に気付いていたからこそ、財産や教養による選挙権の制限を頭から否定することはなく、庶民を啓蒙して漸次的に参政権を拡大していく、という戦略を提言していたし、あるいはまたラディカルな民主主義者ルソーは、共和政国家の基本単位を古典古代的な都市国家のスケールに縮めることを提唱した（既に当時のヨーロッパで現実の国家が広い領域国家となっており、都市国家が時代遅れとなっていた、という現実に対しては、おそらく彼は「連邦制」という答えを用意していたであろう）。これら思想家たちは、自分たちの提示した理論と実践との間の懸隔には十分自覚的で、その間を埋める実践感覚もそれなりにはたらかせてはいたのだ。だが、現実の歴史の展開は、こうした漸進的改革戦略の展望を超えて急激に展開してしまった——その結果が、「大衆社会」への旧タイプのエリートの幻滅として、かつてのリベラルな社会ビジョンの陳腐化につながったのではないか。

更に言えば、そもそもこの「市民的公共性」の理念は、果たしてどこまで魅力的であったといえるだろうか？ 先に指摘したように、リベラル・デモクラシーと自由な市場経済のセットは、先の古典的公共性の四象限図式でいう第Ⅲ象限、小さな「政治」を取りこぼす危険が大きい。ハーバーマスの、そして現代リベラリズムの政治理解においては、ローカルな、小文字の「政治」は大文字の「政治」へと貢献する限りにおいて「政治」的、とみなされ、そうではない場合には単に私的な営みとして、本来の意味での私的領域と混同されてしまう。そして経済的

リベラリズムにおいてもまた、そうした無数の小文字の「政治」は市場の「みえざる手」によって均され、押しつぶされるものとしてしかとらえられない。むしろ「市民的公共性の理念」それ自体が「古典的公共性の理念」からの墮落であり、その魅力はむしろそこになお残存する「古典的公共性」の残骸によってこそもたらされている、としたらどうだろうか？

ここでいう「残骸」とは具体的には何か。ここでリベラリズム以降の我々がしてしまいがちな短絡的誤解を避けるためにも——しかしそうした誤解には、ほとんど不可避と言っていいほどの、十分な理由があるからこそ、リベラリズムであることを理解するためにも、しつこいようだが確認しておこう。

たとえばリベラルな経済学の図式にならって、我々は一方の極に、自由な参入退出に開かれ、可能性としては無数の経済主体がそこに参加するために、個別の経済主体は誰もその全体をコントロールすることはおろか、意味ある影響を及ぼすことさえできない完全競争市場経済を置き、そして他方の極に、少数の、互いをよく知る主体間の閉鎖的な共同体的取引関係を置いて対立軸となす。そしてあろうことか、未開社会の贈与交換も、中央指令型計画経済も、資本主義的な企業組織も、更には生活共同体としての家族さえも、開かれた市場経済との対比において、後者の軸に引き付けて理解してしまう。ギリシアやローマのような、古典古代の都市文明についてさえ、その図式を当てはめてしまうことへの誘惑は強い。つまり、開かれた市場と閉鎖的な共同体的関係との対比によって、公共性と私的領域の対比を理解してしまう、という誘惑がある。もちろんそれとはまったく別に、国家と公共性を対比し、市場も閉鎖的關係も家・個人レベルの私生活もすべてひっくり

めて私的領域と一括してしまう雑駁な見方もある。しかしそのような見方では捉えられないのが、市場経済の公的領域、公共圏としての側面である。

古典的な意味での公共性として市場経済を理解するためには、伝統的な(いわゆる19世紀の、経済学史特有の意味での「古典派」、そして20世紀前半くらいまでの「新古典派」——あるいはケインズのいう意味での「古典派」) 経済学とは異なり、完全競争市場をそのパラダイムとするよりは、むしろ企業——家族企業ではなく、株式を公開している公式組織としての企業や、あるいは少数の大企業がしのぎを削る寡占市場の方がふさわしい。新古典派経済学からすれば寡占市場は「不完全競争市場」であり、特定の株主や経営者、従業員からなる企業もまた市場に対する制限である。無限の、互いに識別できない主体からなる完全競争市場とは対極的な、その存在と性格を容易に識別できる、有限の数の主体同士の関係であるという点において、それは一見、家政や未開社会と同種のものに見えるかもしれない。

しかしながら寡占市場が、現実には少数の主体同士の関係であったとしても、それが市場であるならば、つまり自由な参入と帯出に開かれている限りにおいては、閉鎖的な私的領域とは区別されねばならないし、公式組織としての企業も、株式市場や労働市場に対して開かれていて、金を積めば誰でもその株式を取得でき、縁故によらない公開情報による採用活動を行っていれば、やはりそれは家政とは質的に異なる。

むしろこの観点からしても、完全競争市場は一種の極限——参加者の数が無限大となるという意味で——である。だが新古典派経済学が、より広く言えばバラバラな経済観にとっては、その極限が同時に理念であり、理想であり、つまりは模範、基準であるとしたら、ここで提示

したいわば古典古代的経済観からすれば、それは逸脱——とは言わないまでも墮落である。いくら完全競争市場が開かれていたとしても、そこにおいては参加者のアイデンティティが際立つ可能性が消えてしまう。その意味では逆説的にも、閉じられた家政と完全競争経済は、対極において一致してしまうのだ。

確認するが、伝統的な経済学においては「自由な参入退出に開かれ、そこに参加する主体は無限大の数のライバルに隠れて個性を埋没させてしまう完全競争市場」と「特定の互いによく見知ったメンバーの間で閉鎖された共同体的関係」との対比がなされるのに対して、古典的公共性の図式においては「自由な参入退出に開かれ、参加者は公共の眼にさらされてそのアイデンティティをあらわにせざるを得ない市場」と「公共圏から壁によって区切られ保護された家の中」との間にこそ基本的な対比がある。となれば、「自由な参入退出に開かれ、参加者は無限大の数のライバルに隠れて個性を埋没させてしまう完全競争市場」と「自由な参入退出に開かれ、参加者は公共の眼にさらされてそのアイデンティティをあらわにせざるを得ない市場」との対比はまさに「市民的公共性」と「古典的公共性」との対比である。

ハーバーマスが『公共性の構造転換』において政治に着目しつつ描いている転換は、むしろ「市民的公共性」の墮落としてとらえられているが、まさにこうしたロジックに対応している。大衆民主主義の状況下では、普通の市民ははっきりした政治的アイデンティティを発揮できず、埋没してしまう。すなわち「自由な参入退出に開かれ、参加者は公共の眼にさらされてそのアイデンティティをあらわにせざるを得ない討議場としてのメディア空間」から「自由な参入退出に開かれ、参加者は無限大の数のライバルに隠れて個性を埋没させ、主体的な討論の

参加者ではなく受動的な情報の消費者にされてしまうメディア空間」への転換が描かれている。

しかし社会経済面での転換については、メディア産業における独占・寡占化傾向に論及しているあたりからみても、あるいは後に『後期資本主義における正統化の諸問題』なる著書を表している（「後期資本主義 Spatkapitalismus」はドイツ語の言い回しだが、おおむね20世紀の「独占資本主義」を表す言葉と考えてよい）ことから、自由市場経済から独占資本主義への転換としてとらえているとみてよいだろう。「自由な参入退出に開かれ、参加者は公共の眼にさらされてそのアイデンティティをあらわにせざるを得ない市場」については、その視野から抜け落ちている。

だが我々は先にも述べたように、資本主義経済の発展段階としての「独占資本主義」なる概念の意義については大いに疑いを持っている。伝統的な歴史研究はたしかに、この時代、特に重化学工業の成長に伴ってそれ自体巨大な官僚組織である巨大企業の成長に注目してきたし、またそうした企業による市場の支配、操作への懸念、それへの対応としての独占禁止立法を重視してきた。またその一方で農業保護政策や労働立法など、そうした「強者」に対して「弱者」を保護するための国家による市場経済への介入と操作の本格化もまた、この時代の特徴とされてきた。その限りでこの時代を、ある意味での「転換期」と見なすことには一定の根拠がある。

ただしそうした変化の中心は国家による立法、政策や、それを支える政治理念のレベルにある。企業のレベルでも新たな経営手法、組織原理の登場を見ることはできるが、それも広い意味で「理念」的なものとみなすことができよう。それに対して経済の実態が本当に「段階」的に不連続的な変化をこの時期起こしたのか、

は実は明らかではない。巨大企業が増えたことで、それ以前に比べて市場における競争のありようが質的に変化したことを計量的な手法で堅実に実証した研究は、管見の限りでは存在しない。そもそも巨大企業の増加自体、重化学工業の成長に伴う一時的な現象で、産業構造が変化するに伴ってその傾向は逆転することもあり得る。つまり「資本主義経済の成長とともに、大企業のウェイトが増えて、市場が独占的になる」という歴史法則、傾向は存在しない、と言ってよい。

すなわち「公共性の構造転換」の経済的側面もまた、自由な市場経済から独占資本主義へ、という伝統的なマルクス主義の枠組みにとらわれたハーバース自身理解からは離れて考える必要がある。そもそも「資本主義が自由主義段階から独占資本主義＝帝国主義段階へと構造転換した」という仮説自体が怪しいわけであるが、仮にそれを受け入れたとしても、その変容のどこが厭わしいのか、についてはよく考えてみる必要がある。教科書的なリベラリズムの経済学に従えば、自由な市場経済の方が独占資本主義よりも効率的であるのだから、その観点から独占資本主義への転換を嘆き批判することに意味がなくはない。しかしそれ以上に重要なことは、後者においては市場への新規参入、参加の機会における公平性が損なわれるということである。公共圏としての市場が損なわれる、ということにその問題の核心がある。しかしながらその、市場における公共性の弱体化は果たして、もっぱら巨大企業による独占の進行によって引き起こされたものといえるのだろうか？むしろ「自由主義段階」においても進行していた、市場経済それ自体の大規模化、その中での個々のミクロ的経済主体の存在感の喪失——それは正統派のリベラル経済学にとっては、まさしく寿ぐべきことなのだが——こそが、問題の

核心だったのではないだろうか。

【参照文献】

ハンナ・アレント『人間の条件』(ちくま学芸文庫)、
筑摩書房、1994年
ミシェル・フーコー『安全・領土・人口』筑摩書房、

2007年

ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』未来
社、1994年
木庭顕『ローマ法案内』羽鳥書店、2010年
Moses I. Finley. *The Ancient Economy*, University
of California Press. 1992